

1. 研究開発課題名：好酸球性消化管疾患、成長発達障害を防ぐための血清診断法開発研究
2. 研究開発代表者：野村伊知郎（国立成育医療研究センター、免疫アレルギー・感染研究部、上級研究員）
3. 研究開発の成果

はじめに；好酸球性消化管疾患（EGID）は新生児から高年期まで存在する。特に嘔吐、血便などの消化器症状がほとんど見られない、体重増加不良、栄養吸収障害を示す患者グループは、診断が非常に困難であり、数多くある鑑別疾患の中で、本症を見出すのは難事である。EGIDのうち、新生児～乳児の1/5程度がこのグループに属する。消化管の疾患であることさえ特定されずに、重症ベッドで寝たきりとなっている患者が存在すると考えられる。このグループであっても、消化管内視鏡を行って、消化管粘膜を顕微鏡で観察したなら、EGIDの診断は可能な場合が多い。消化管内視鏡は特に新生児～乳児ではハードルが高いため、その前に血清などによるスクリーニングが開発できれば、役に立つことは容易に推測される。

血清 TSLP, IL33 の上昇が乳児体重増加不良タイプで見られた事実について論文報告を行った：我々は血清のサイトカイン、ケモカインを多数同時に測定し、胸腺間質性リンパ球新生因子(TSLP)とインターロイキン-33 (IL33)が体重増加不良グループで特異的に上昇していることを突き止めた。これを *Journal of Allergy and Clinical Immunology* に報告した。

診断検査開発コホートを開始：新生児～乳児、幼児～年長児、成人において、診断検査開発コホートを開始し、患者さんを診療した全国の主治医から着々と検体と医療情報が集積しつつある。

年長児～成人の EGID におけるバイオマーカー候補も発見された：新生児-乳児のみならず、年長児～成人の血清バイオマーカー候補も発見された。

消化管部位によって、ケモカインの種類が異なることが分かった：EGID、炎症性腸疾患、疾患なし対照の消化管粘膜マイクロアレイを比較した。この結果、消化管の部位によって、産生されるケモカインが異なることが判明した。病態を考える上で重要な発見と考えられた。

新生児-乳児食物蛋白誘発胃腸炎の全国疫学調査：新生児～乳児の発症率を解明すること、そして地域における発症率の差を見る目的で追加研究費を受けて行った、全国疫学調査も全国の医療機関のご協力により、十分な回答数を得、解析が順調に進んでいる。